



失いたくない歴史・ 伝統を後世に

春峰会

春峰会会長の森下良一さん



十市土人形 シンプルな筆遣いと
色彩が南国らしい温かさを感じさせる

地域の伝統文化を掘り起こし、十市の魅力を再発見する活動に取り組んでいる「春峰会」。

「春峰会」は、幕末に十市村庄屋を勤めた後、土佐の歴史や民俗の古書を整理して、「土佐国群書類従」を編さんした歴史学者、吉村春峰の精神を受け継ごうと、昭和56年に発足した歴史民俗研究グループです。

同会では、研修と親睦を図りながら、歴史、民俗の調査研究を重ねてきました。そんな中、「十市の歴史や文化を次代に継承しながら、元氣な地域づくりをしよう」との声が強まり、平成17年5月、冊子「とおち」を発行。この冊子は、小学生の郷土学習の副読本としても活用できるように編集されています。

タイトルには地名の「とおち」と「十(とお)の知(ち)を得る」という意味があり、自然を大切に、ふるさとを心の中に」というメッセージが込められています。

本の中では、十市のイメージポイントである、石土池・やまもも・地引網漁・十市土人形などが紹介されていますが、同会の森下良一会長の話で興味深いのが十市土人形復

一過性で終わらせない まち興しを

ごめん町づくり委員会

会長の西村浩利さん



ごめんほのぼのMAP
楽しいイラストで町並みを紹介

ごめん町づくり委員会は、平成14年の高知国体を期に商店の後継者やご婦人方を中心に、後免町の商店街を活性化し地域を元気にしようとして活動している団体です。

全国的にも珍しくユニークな地名である「ごめん」を生かした町興しの一環として、やなせたかしさんの提案で昨年からは始まった「八ガキでごめんなさいコンクール」は反響が大きく、第1回、第2回と海外からの応募も含め、2千通を超える応募があり、中には点字での参加もあったそうです。また今年には「ごめんしょうが飴」が県産の生姜と大根をすりおろして作られているのをヒントに、「南国市ごめん杯大根早おろしコンテスト」を併せて開催しおおいに盛り上がりました。

来年の3回目には、過去の作品を小冊子にまとめ全国に発信するといった楽しみな企画もあるそうです。

また、「ごめん・なはり線の後免駅の愛称が「ありがとう駅」となり、全国からごめん町を訪ねてくれる人が徐々に増えてきました。そこでごめん町を多くの人に今以上に楽しんでいただくため、

委員自ら歩いて再発見した町の良さを盛り込んだ「ごめんほのぼのMAP」を作製。案内板をJRごめん駅、ありがとう駅、ごめん町商店街の3カ所に設置し、マップはJRごめん駅やごめん町商店街のお店で配布しています。

今後同委員会では、「ごめん」と「ありがとう」をキーワードに、各商店と協力して、ごめん町独自のユニークなものを企画し、創り出していくことで、そこに住む人自らが楽しみ、ここを訪れた人にもごめんの楽しさや優しさも人も活気にあふれたそんなごめん町になるように活動を続けていきます。

応募数2千通を超える
八ガキでごめんなさい
コンクール」毎回ユニークな作品が集まる

しらゆり亭の一品

トマトようかん



右は考案中の大葉ようかん

日高村のトマト生産者が考案したという料理。トマトの風味がたっぷりのようかんです。

作り方

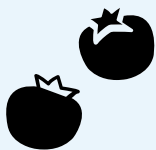
トマトはざく切りにして、中火で柔らかくなるまで煮る。ざるでこし、種と皮を除く。

寒天は分量の水で煮て溶かし、砂糖とのトマトの液を入れる。このとき、寒天液とトマトの液との合計を1,000ほどになるようにし、中火で900になるように煮つめる。

型に流し入れ、冷やし固める。

材料 8人分

トマト(完熟)...800g
寒天.....2本
水.....400
砂糖.....300g
塩.....少々



島崎広報委員長コメント

今回、それぞれ違った地域や立場から、地元の振興や活性化のために活躍をされている3団体を取材させていただきました。

まだまだ多くの団体がそれぞれの地域社会に根ざした独自の活動を展開されている事だろうと思います。活動は違ってもみんな一人ひとりが自分の暮らしている地域社会をこよなく愛し誇りに思い、その素晴らしさを食文化や伝統文化そしてイベントを通じて再認識し、より多くの人たちに知ってほしいという熱い思いに違いはありません。

目新しいものや、外の社会に眼を向けがちな現代にあって、本当に大切なもの、なくしてはいけないものはなにか、今一度自分自身の生活や足元を見直してみる良い機会となりました。

元への取り組み。
十市には人形谷という地名があり、ここでは藩政時代中期から明治にかけて、盛んに土人形が焼かれていたといいますが、しかし現在では、人形谷付近は果樹園になっていて、完全な土人形は一体も出ていないとのこと。そこで再び土人形を作ろうと、同会が立ち上がりました。あくまでも十市独特の方法にこだわって、素朴な味わいを復元しようと努力しています。

この人形を、婚礼の時に母から娘に持たせたそうです」との話に、もしかしたら、どこかに大切に保管されているのでは、という期待が膨らみます。

春峰会の冊子「とおち」小学生でも理解できるようにと分かりやすく編集されている



今後も地域の活性化につながり、子どもたちに受け継がれるものを探っていこうと取り組んでいる「春峰会」のこれからがさらに楽しみです。

取材を終えて

地域を大切にしながら
さまざまな活動を発信

今回、3つの団体を取材しましたが、その他の各団体も含め「町を・村を・人を」元気な地域づくりのために、そして、歴史や文化を次代に継承していくなど、日々の努力をされています。

共通する点は、やはり生まれ育った地域を大切にしながら、後継者の為に、やりがいや生き甲斐づくりを模索しながら形づくっていることです。

白百合グループは、地元で取れたての食材を生かした商品開発や、大自然と山里の人間味を知ってもらおうと都市農村交流の場づくりとして「しらゆり亭」を立ち上げるなど。そして、ごめん町づくり委員会はごめん町商店街の活性化のために、やなせ

たかさんの協力を得ながら新イベントを企画。ごめん町をアピールしお客様をなんとかがめん町商店街に呼び戻そうと奮闘中。春峰会は十市の文化や歴史・民俗を記録に残すために調査研究を行うなど、3団体共地道な活動の中で日々挑戦し続けていて、着実にその功績が評価されつつあります。

私(市民)たちも、協力できる所は積極的に協力し、参加しながら盛り上げていかなければならないと思いました。

地域からさまざまな活動を発信することで、南国市が元気都市であることを。そして、住んで良し、訪ねて良し、人間味の良さ素晴らしさを更にアピールして、誇りある南国市となることを願う次第です。